

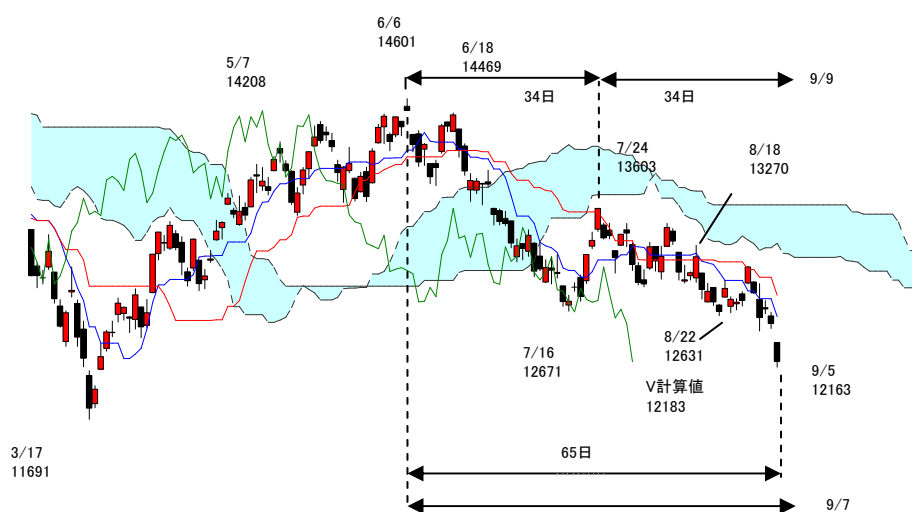
△1. 相場コメント

(株)経済変動総研 細田哲生

前回相場コメントでは8月29日陽線は8月安値で変化月、変化日が決まる可能性を残した、としたものの次の2点を懸念要素として挙げておきました。

一つは8月29日高値が下げてきた基準線に抑えられる可能性があること。もう一つは7月3日から41日目であるため基本数値42日で同水準をつけ下落ということも考えられること。であります。

その上で押し目としては転換線を割ってはいけないこと、また8月29日からの下落では9月3日以降続落では9月8日までの下落が強調されることになり大いに警戒すべきであることを述べました。

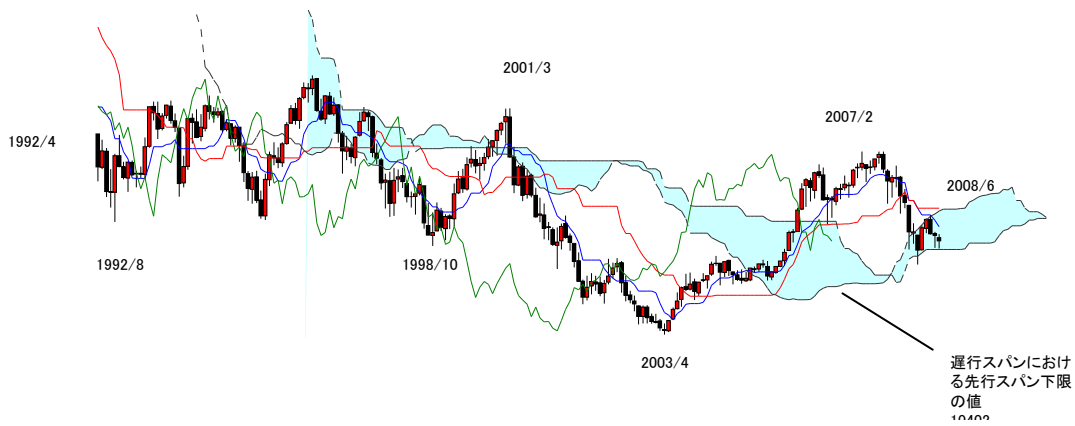


結果9月2日には転換線ばかりか8月安値を割り込みまして、これまで重要視してきた1月22日安値、月足先行スパン下限をも割り込んだのであります。9月3日の戻りも転換線に届かず陰線は続き9月5日安値12163をつける結果となりまして、8月22日安値でのV計算値12183を割り込むものになっています。

9月5日は6月6日から基本数値65日目ではあるものの、三波動構成から考えれば67日目9月9日がより重要といえるでしょう。(ここで訂正ですが前回コメントした9月8日は9日が正しいものになります。)8月18日高値から17日目、8月22日安値からの変動は9日目が同水準、13日目が9月9日ということですから中途半端な戻りではかえって悪いということも頷けるはずであります。

この変動は何よりも重要視していた8月変化月が安値で決まらなかったということをお大事にすべきでありまして、安値で決まらなかったばかりでなく結果的に月足均衡表では下げてきた転換線に頭を抑えられ、一種の下げの起点と見なせるのでありまして、2月高値を否定するのに容易ではなかったのと同様に仮に9月5日が底であったとしても容易に上げ相場と出来ぬ変動であります。

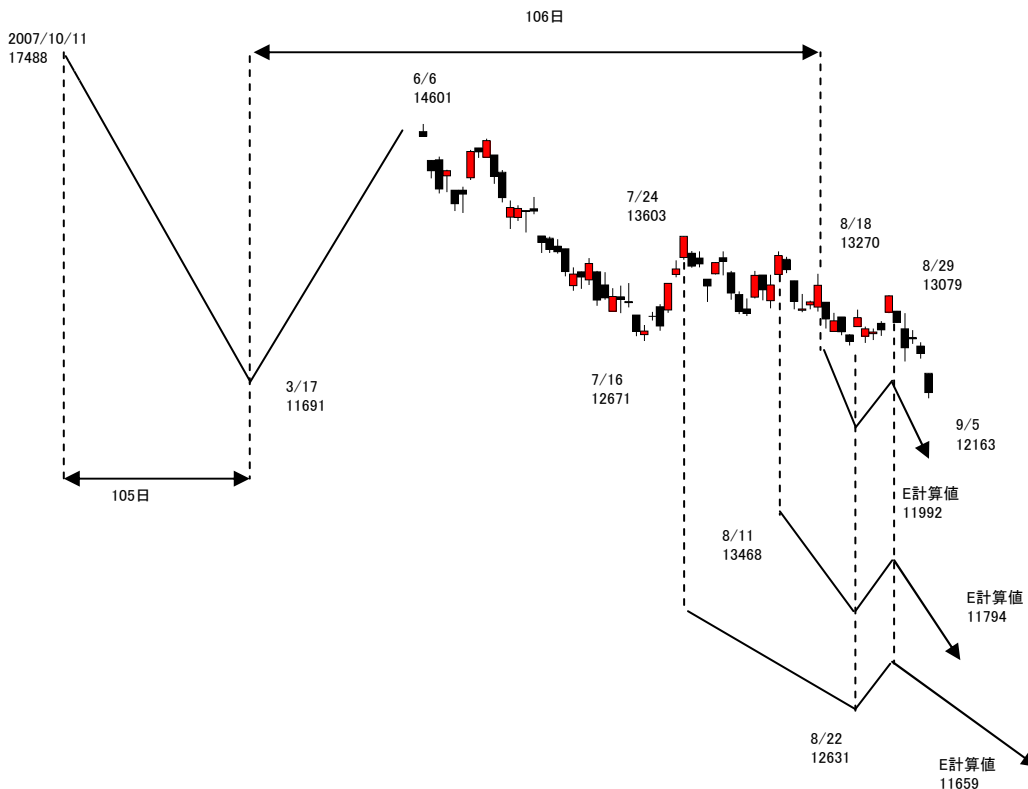
週足変遷でも2005年10月高値からの基本数値で147週目、151週目と同水準、あるいは高値で決まってしまうのでありまして、ちょうど週足均衡表での逆転が同時に成されての下離れですから、何れにせよここから急激に悪化する可能性は極めて高いというほどの典型的な表れ方となっています。



従って現時点では3月17日安値を割り込む可能性は極めて高く、仮に割り込まず戻りを見せたとしても次の変化月10月には再び10400円水準までの暴落を懸念せざるを得ないと直観します。

変化日9月9日は6月6日高値からの三波動構成の最も大きな時間関係がありますが、7月24日でのN値は11673、これでは3月17日安値を割り込む結果となり容易に下げ止まりを確信できません。

8月22日でのE計算値は11992(8月18日起点)、11794(8月11日起点)、11659(7月24日起点)となりますが、8月18日の重要性を考えれば11992を割っては下離れの独立性は決定的でありまして、その点でも3月17日を割らずに経過できるとは考えにくいのであります。



昨年10月高値から今年3月安値までは105日の下落であります。3月安値から106日目は8月18日高値であります。

救いがあるとするれば昨年6月高値から9月5日まで301日間の変動であること、ここに至る過程で12300円台の計算値が極めて多いことから週明け直ちに12300円を上抜けばこの水準でのモミアイを経て適切な位置での下げ止まりが確認しうるかも知れぬ、という点ぐらいでありまして、月曜続落ではこの想定も成り立ちません。

為替も一般者が参加するようになってからは初めてと行って良いほどの暴落がありまして、二三間くところではこれまでの経験がたたって大きくやられたという人が多いようであります。

当面静観しつつ慎重であるほか無いようでありまして、この局面では極力勝負を避ける方が一般者にとっては良いものと考えます。

さてここで雑文となりますが、今年一年の変動についてはこれまでと比較して認識が甘すぎたとこのところ痛感しておりまして、けちのつけ始めは昨年末、大納会後のラジオ収録でありました。

昨年末はなかなか一年の変動が整理できず、よって今年一年の大まかな想定が遅れたのであります。何とか1月での変動が重要であること、1月変動によって今年にはモミアイ相場か下げ相場、下げ相場の可能性は極めて高い、と結論づけました。

打ち合わせにおいて来年の相場観をという局面で、極めて悪いといいましたところ、それは年始の放送のこと、業界の習いでやんわりとしてほしいということでモミアイ相場を強調してしまったのであります。

大体において長期、中期、短期の相場想定は、固執することなく相場変動のあり方そのものを重視して適切に組み立てるべきですが、先ず長期展望がどうだという軸を明確にするほうが私にとっては良いのでありまして、これをあえてぼかしてしまっただけがここまでの幾つかの失敗に繋がっているような気がします。

もっとも私はこれまでの相場コメントを卑下するつもりは毛頭ありません。充分益するものであるとの自負はありますが、改めて目を曇らせるものは常に自分の中にあるということに自覚した次第です。

しばし危機的状況は日経平均株価だけでなく、為替、商品様々な変動で見られることでしょう。危機的状況とは単に暴落を意味するのではなく、これまで適切に対処できていた人も大いに振り回される、という意味であります。

この様な変動を想定し、この時のために準備を充分してきた人を除いて私は9月変動は静観すべきとさえ考えますが、今回も「均衡表の急所」を載せました。

こちらを良くお読みになり結果を出すべき相場は決して逃げはしないということをご確認ください。(9月6日記)